

# 『狭衣物語』 卷四の贈答歌

——狭衣と故式部卿宮家母娘との贈答場面、再考——

一 文字 昭子

『狭衣物語』巻四を読むと狭衣と故式部卿宮家母娘との贈答歌の場面が延々と続くことに気づかされる。試みにこの場面の長さを調べてみると、巻四全体の約五分の一を占めている<sup>(1)</sup>。数量的な面からいえば巻四の中で重要な意義を持つと言えそうである。

従来この場面については、『源氏物語』との関連や物語の構造上などの視点から先行論文が出されているが、いずれの評価も「よすが」<sup>(3)</sup>「形代」、「変奏」「終結」等の結論であり、この場面が物語上において、プラスの意義を持つという捉え方ではない。また当該場面の贈答歌は、狭衣が故式部卿宮の姫君に求婚の歌を贈りながら、同じ歌の中に姫君の母にも恋情も示すという変わった趣向を持っていることが特徴としてあげられるが、その和歌についても特に注目した指摘はない。石壁敬子氏が他の和歌の技巧を説明をする中で、「狭衣の歌は妹と母への思慕を込め、両義性を持つが、母尼はそれを理解していない」と触れられている程度のものである。相手の理解しない和歌を一方的に狭衣が贈っているだけならば、そうした二人ないし三人の贈答が続くことになどの面白さがあるのか、やはり

疑問が残る。この疑問を解決するには、最初からこの場面を再検討することが第一に行うべきことであろう。そこでまず当該場面の和歌の諸注釈の内容を再検討し、他の物語の描写や、史実との関連も考慮に入れ、再考を試みた。

なお、文中の本文は特に断らない限り、伝為明筆本の本文を用いた<sup>(5)</sup>。巻四まで揃っている鎌倉期の古写本のうち平安時代により近い本文を残していると考えためである<sup>(6)</sup>。但し、説明の便により表記は私に改め、適宜記号を附した。なお和歌の部分については日本古典文学大系（大系）、新潮日本古典集成（集成）、新編日本古典文学全集（新全集）における該当箇所を掲げた<sup>(7)</sup>。

## 二

巻四の当該場面では主人公狭衣は妻にと思いでいた源氏宮が齋院となり、息子を産んだ女二宮も出家し、心ならずも妻とした一品宮とは全く愛情が通うこともなく鬱々として日々を送っている。その様子を案じた宰相中将は同母妹を狭衣に薦める。この妹が故式部卿宮の姫君と呼ばれる女性である。当初気乗りがしなかった狭衣は、偶然その姫君を垣間見て心惹かれるようになる。しかしながら

この垣間見の時、狭衣が最初に見たのは姫君の母、故式部卿宮の北の方であった。狭衣は自分の母ほどの年である北の方に惹かれた自分の心を「いとにげなく、あるまじきことの様かな」と思いつつ、「折り見ばや朽木の桜ゆきずりにあかぬ匂ひの盛りありや」という独詠歌を詠み、北の方への恋心を表明している。この後、狭衣は姫君にあてて求婚の和歌を贈る。次に掲げる①の歌である。

よもすがら、ありがたかりし火影は忘れ給はず。かく世づかぬ心のうちを、むげに知らせぬがいとをしければ、慰めがたくて、例の姫君の方に聞こえさせ給えるやうなれど、異様の心添ひ給へるなべし。

①散りにける花に心を染めしより  
ひとかたならずものをしぞ思え<sup>8)</sup>

かやうに聞こえ給ふ折しも、宰相の中將参り給へり。さまざま思し放つまじき御ゆかり、なつかしうて、常よりも細やかに語らひ給ふついでにも、琴の音聞きさまは、ほのめかさまほしけれど、思ひかけぬほどに、ありきしたりと見聞かれじと思す。

(三三二ウ)

大系(三六四頁)、集成・下(二二二頁)、新全集②(二四五頁)桜が散る季節の贈歌としては相応しいが、「散る」という語は適齡期の姫君には些か不似合である。和歌前文の傍線部分から「一方ならず」という言葉が「並一通りではなく」という意味とともに、「姫君、母君の一方でなく」という意味にも導かれる。和歌自体に、狭衣が最初に北の方を見かけたときの独詠歌「朽木の桜」が響き、「下紐」<sup>9)</sup>が「朽木の桜の心こもるなるべし」と注するように、どちらかといえ北の方に比重がかかっているとされる。伝慈鎮筆本は

「ひとにかたらぬ」として、はっきりと北の方へ限定する本文となっている。独詠のため物語世界においては、第三者が①の和歌を読んだとしても狭衣が北の方に思いをかけていることはわからない。①の歌に二つの意味が込められていることがわかるのは狭衣と読者のみである。

さてこの姫君は東宮からも求婚されている。そのため対応に苦慮した北の方は姫君に、東宮には姫君が自筆自作の和歌を返歌するようにし、狭衣からの贈歌に対しては自分が代作するという方法をとった。したがって①の狭衣の贈歌には北の方が返歌している。求婚の場合、東宮という別格の求婚者を除けば、最初、保護者の代作となるのは当時としてはごく当たり前のことであり、特に問題はない。従って代作であつても贈答は成立していると判断した。返歌は次のようなものであつた。

まことありつる御返事もちて参りたるを見て、さりや、かくのみひまなからんには、いかがはと、煩わしがるもおかしくて、ひきそばみて見給へば、

①散る花にさのみ心をとどめては春より後はいかがたのまむ  
夜べの火影の手なるべし。いとつましげに書かれ<sup>10)</sup>などはせて、  
ひとゆきに引きわたされたる筆の流れ、文字様など、これや上手などいふべきと見えていとめでたし。

(三七ウ—三八オ)

大系(三六八頁)、集成・下(二二七頁)、新全集②(二五〇頁)この返歌は、単に狭衣贈歌の「散りにける花」と季節の「散る桜」とをそのまま用い、求婚に対して疑問を呈する、返歌の型式通りのものである。また「散る花」をそのまま返すことによつて、狭衣歌

の「一方ならず」の二つの意味、「ひとつとおりではなく」と「姫君だけでなく母君も」という含みを理解したか否かを明確に表明しない。『狭衣文談』は「姫君のかはりに母君の哥也かくれたる心なし」とする。「かくれたる心なし」とは、「散る花」が北の方自身を指し、自分に心をとどめるようでは、自分の死後、娘は何をたよつたらよいのでしようとする素直に詠んだものと解釈したということであろうか。なお大系、集成、新全集、全註釈諸注も同様の解釈をとる。物語で設定されている北の方の教養の高さと、姫君を「散る花」に例える不自然さを考えると、これら諸注の解釈通り、北の方は「散る花」を自分ととり、狭衣の歌に込められた自分に対する恋心を「理解し」ていると解釈してよいであろう。北の方はそのことに不快感を示したりせず、無難に受け流して返歌していることになる。

### 三

このあと、物語は後一条帝姫御子誕生の描写に続き、狭衣が、東宮から故式部卿宮の姫君への贈歌を見たことが記される。

昼方、大将殿東宮の御方にまいる給へれば、御手習いなどさせ給て、いろいろの文どもとりちらされたり。「かやうのものはなど時々見せ給はぬ。いとうるさき事には召し使はせ給へど」と怨じ聞こえさせ給へば、いとなまむつかしと思したる気色にて、中々ふともえとり返させ給はぬに、紫の紙のなべてならぬが、結びめなどもただいまと見ゆるを、えおしまかせ給はで「式部卿の宮の聞こえよと大宮のたまひしかば、宣旨が教へつるままに書いてやりつる」とて給はせたり。「宣旨いかに、はかばかしき事教へ聞こえ侍らん」と笑ひて見給へば、

のどかにもたのまざらん庭濼  
かげ見ゆべくもあらぬながめ

とかや。ところどころほのかなる墨つき定かならねど、母上の御手にいとう覚えたれと思ひなしにや、いまし若やかにうたげなる筋さへそひ給ひて、今まで見ざりけると返す返す口惜うて、うち置きがたく思さるる事限りなし。

(四一ウ—四二オ)

大系(三三七二頁)、集成・下(二三三頁)、新全集②(二五六頁)狭衣は、その場で東宮の硯と紙を使い、姫君に次の②ア、イの和歌を二首贈る。しかし東宮には見せず、贈る相手も故式部卿宮の姫君であることは隠す。

御硯・紙など申給てひきそばみて書き給ふ。やがてこの宮になるべし。

②アいつまでとしらぬながめの庭濼

うたかたあはでわれぞけぬべき

ことわり知らぬを慰めかねてなん

②イ口惜しや緒絶えの橋はふみみねど

雲居に通ふあとぞひまなき

など書き給ふと「いづくへぞ、たべ、見む」とうち探り、引き奪ひなどはし給はで、いまよりいとうるはしく、気高げなる御気色なり。いとすげなくて「世の中ありにくく思ひ侍れば、いかがはせんとて、生女房のあはれにしつべからむ。語らひ侍りて、案内し侍るぞ」と啓し給へば、いみじく笑はせ給て、

(四三オ—四三ウ)

大系(三三七二頁)、集成・下(二三三頁)、新全集②(二五八頁)

この二首の狭衣贈歌に対しての返歌は書かれぬが、物語上、記述されぬだけで北の方からあったことになっている。権大納言にその返事を読んでるところを見とがめられた狭衣は「これは例の宣旨書きとみ給へば、あながちにも惜しからず、こまこまと破りて」と姫君の自筆ではないとして破棄している。つまりこまこまで狭衣は特に北の方に執着していたわけではなかった。その後、狭衣は北の方に対して、東宮と自分のどちらに娘を託すか、せまる和歌を詠む。

なのめならぬ有り様を昔よりききそめて、ついに見ずなりな人は、本意なかりぬべければ、ただ宰相のもとへひまなくせめおこせつつ、その中にぞ入れ給ける。ただいま東宮より使ひ参りぬと見置き給ひて、出で給ふまに例のこまやかに恨みつげ給へる中に

くらべみよあさまの山のけむりにも

誰か思いか焦がれまさるぞ

と心の中は、さりともたぐひあらじとこそ、思つづくるを、今日ばかりは猶とり違えてもの給はせよかし、とぞある御文のたぐひなくめでたきを、見知らぬにはあらねど、さしはなれ難き御返事を、まづまづと聞こえさせ給ふほどに、またはいかがとて、例の上ぞ聞こえ給ふ

あさましやあさまの山のけむりにも

立ち並ぶべき思ひとも見ず

とぞありける。

(四五オ―四六ウ)

大系(三七五・三七六頁)、集成・下(二三七・二三八頁)、

新全集②(二六二頁)

狭衣歌は、私と東宮とどちらの思いが勝っているかという大胆不敵な詠みぶりである。対して返歌は、鈴木一雄氏が指摘されている様に贈歌の東宮と狭衣との比較を、浅間山の煙と狭衣の比較にすり替えて返歌している。北の方の巧みなすり替えは和歌ならばこそのもので、この場面の醍醐味となっている。

#### 四

このあと北の方の病が重くなり、出家へと物語は進行する。狭衣は北の方出家のことを聞くと、姫君宛ての手紙に③の和歌を書く。

大将かくと聞き給ひても、やつしがたかりし、かたちの思し出でられて、変はらぬさまをまた見ずなりぬると、口惜しう覚へ給へり。宰相の御元へあはれなる御とぶらひねんごろに聞こえさせ給ひて、例の御文あれば、やがてとり具し給て、上の御方に参り給へり。忌むことの印にや、今日はすこし物覚え給ふ。ただいまにてなど見せ奉らせ給ける。あくまで情けありぬべかりける御心ざまを、口惜しく見たてまつりおかずなりなん事など弱げながらのたまふ、いま一つの御文には、

③われのみぞうき身を知らず過こしける

思ふ人だにそむきける世に

とありけり。上、常にのたまはするを聞こえさせでのみあるも、無下にも思ひしらぬやうにも思すらんかして、姫宮に同じさまにて臥しつみたまへるを、この御返し聞こえ給へ、後ろやすく見奉りおき聞こえて、かたちをも変へ、限りの命も絶え果てんとこそ思ひ侍りつれど

(四九オ―四九九)

大系（三七八頁）、集成・下（二四一頁）、新全集②（二六六頁）

③歌は「思ふ人」をどのように解釈するかで二つの意味が生じる。狭衣からの姫君宛ての手紙は、まず北の方が見ることを承知の上でのものであるため「思ふ人」を狭衣が北の方を「思ふ人」といつているのか、姫君の立場にたつて母である北の方を「思ふ人」というのか、どちらともとれる。諸注のうち、新全集のみ狭衣が北の方を「思ふ人」としていると解釈し、大系、集成、全註釈は、姫君が母君である北の方を「思ふ人」であるとす。全註釈の説明によれば、姫君の立場になって「思ふ人」と解す根拠を、この場面にあとに記されている姫君の返歌が「思ひながらも」と、姫君たち兄妹を母である北の方が思っていることを詠んでいるので、としている。たしかに、姫君が返歌を返す限りは、贈歌の「思ふ人」をそのように解釈するしか返事のしようがない。しかし、後から返された姫君の歌を根拠に、翻つて狭衣歌を解釈するのは、物語世界の時間の進行から考えると問題がある。読者は結果から前の出来事を判断できるが、物語世界の人物は、まず狭衣の歌を詠みそれのみで狭衣歌を解釈し、返歌を考えざるを得ないからである。

この「いま一つの御文」を宰相中将は妹宛のものと思つている。それが当然の成り行きであるが、最初にあけるのは北の方である。狭衣はそれを十分承知して③歌を書いている。狭衣から姫君宛の文の返事はこれまでは北の方が代作代筆していた。この文から姫君に直接返事をさせるか、これまでどおり自分が代筆するかは、北の方の判断にゆだねられている。また宰相中将が③歌を母である北の方と共にみていたとしても、狭衣歌にこめられた真意がわかるのは北の方だけである。通常③歌をその和歌のみで解釈しようとする場合、

「思ふ人」は「私が思ふ人」と解す以外にはない。勅私撰集や私家集などの歌は構造上、物語和歌のように複雑な伏線を持ち得ないからである。

病篤い北の方は娘を狭衣に託す決心をし、その承諾の意図を明確に示すために③歌から、娘の姫君に直接返歌をさせることを決意する。狭衣が自分のことを真実思つてくれるのであれば、娘を大切にしてくれるはずであるという北の方の思惑であろう。そして姫君が直接返歌する場合、③歌下句を狭衣があえて自分の身になって詠んだものと解するしかない。通常の和歌の「思ふ人」は「私が思ふ人」だからである。そう考えるとこの贈答歌の真骨頂は、三者の間で意味がずらされていく、その巧妙な変質にあるということになる。浅間山の和歌で北の方が狭衣の歌の意味をずらし、ここでは姫君の歌の意がずれたわけである。姫君が直接返歌した時点で、狭衣は北の方から正式に婿がねとして許されたことになる。この後は狭衣と姫君との直接の贈答歌が記されるはずであるが、物語は依然として狭衣と北の方の贈答歌を書き続けていく。それはこの場面の主眼が狭衣と北の方の和歌のやり取りにあることの証である。北の方の病は悪化の一途を辿り嵯峨野の寺へ移る。狭衣は病氣見舞いに訪れ、今度は北の方と直接の贈答がはじまる。

頼もしげなきは、うち聞く人だにいと悲しきを、まいてかの御心の中を思しやるぞ、さまざまに、いとほしき忍びがたきことわりの御事とは言ひながら、あまりさのみ思し入りたるを見奉り給へれば、御心地もいとど苦しく思し召さるらんかし。猶思し慰むべくこそ人々も聞こえさせ給はめと、ほどなく、すくよかに聞こえ給へど

④我もまたますだの池のうきぬなは一筋にやは苦しかりける  
と言ひ消ち給ふ気配、聞き知らんに聞かせまほしきを様こと  
なる心のうちをいかでか聞き知りたまはむとて、

④消えぬべき心地のみするたぐなはは

ますだの池もかひなかりけり

げにいと絶え絶えにて心細げなるは見置きがたけれど長居せん  
も苦しくや思ほされんと思せば、今よりはたどたどしからぬ程  
にも、とて出で給ふに、

(五六〇—五七〇)

大系(三八四頁)、集成・下(二四九・二五〇頁)、新全集②  
(二七六頁)

諸注は「一筋にやは」と北の方だけでなく、姫君に対しても思いが  
あると解釈している。『狭衣下紐』の「姫君は勿論。御母もほのか  
に見給へる也」という解釈から、新全集の「ただ一つのことによつ  
て苦しかったわけではありません」というものまで、狭衣が北の方  
と姫君の双方を思っているという解釈に異同はない。

また諸本の狭衣贈歌が「うきぬなは」で問題がないのに対して、  
北の方返歌は伝為明筆本の「たくなは」、「伝為家筆本の「うきぬ  
なは」、伝慈鎮筆本の「ぬぬなは、」と異同がみられる。「益田の池」  
という語は共有している。「ぬぬなは、」は「ぬぬなはのくるしか  
るらん人よりも我ぞます田のいけるかひなき」(『拾遺和歌集』卷十  
四、題しらず・よみ人しらず・八九四番歌<sup>14</sup>)に近い表記と考えられ  
る。北の方の返歌は狭衣贈歌の「うきぬなは」をそのまま自分のこ  
とに置き換えるか、あるいは言葉を換え「たくなは」「ぬぬなは」  
とずらして自分のことに置き換えるかという違いとなる。「たくな

は」は楮の織維で作った白い縄で『枕草子』に「舟に男は乗りて、  
歌などうちうたひて、このたくなはを海に浮けてありく」と書かれ  
た箇所があり、<sup>15</sup>この例を踏まえて、北の方と狭衣との女と男としての  
意識を示していると考えられる。「ぬぬなは」は益田の池の葦葉  
のことで、大系の指摘のように「寝る」を響かせ、男女の意識が入  
る。つまりどの語にしても、これは狭衣と北の方の男女間の贈答意  
識を示している。全く同じ語で対応するか、あるいは『拾遺集』の  
本歌を響かせるか、『枕草子』の文意を響かせるかの違いにすぎない。  
歌枕「益田の池」は前述の『拾遺集』八九四番歌が初出で、次例  
は「わがこひはますだのいけのうきぬなはくるしくてのみとしをふ  
るかな」(『後拾遺和歌集』卷十四・題不知・小弁、八〇三番歌)で  
ある。ここから「益田の池」という語は糸などを繰る「くる」と苦  
しいの「くる」を掛けたものと、「生けるかひなき」「としを経る」  
ことと結びつき、病の北の方に相応しい。また狭衣贈歌の説明とし  
て本文に「いひけち給けはひ」「きかせまほしきを」と書かれてい  
ることから、狭衣と北の方が直接二人だけでやりとりしたもので、  
姫君や他の人は全く知ることはない。狭衣贈歌の「ひとすちにやは」  
は「姫君一筋だから苦しいのではなく、あなたのことも思っている  
から苦しいのです」という北の方への思いを述べたもので、対して  
北の方は狭衣の思いを否定や拒絶したりすることなく、狭衣の恋心  
が今以上に増したとしても甲斐のないことだという事実を淡々と伝  
えている。

## 五

母と娘への恋情を一首の歌で同時に述べるという設定は、現存す

る平安の物語には見られないが複数の女性へ同時に思いを表明することは古代では珍しいことではない。『伊勢物語』初段の例は「女はらから」を一人（主人公の姉妹）ととる解釈もないわけではないが、多くの解釈は複数であり、また「いちちはやきみやび」の解釈はともかくとして、歌を贈られた女性同士が血縁関係にあっても、彼女たちに和歌を贈ることを肯定的に捉えている。

母と娘の双方に恋情を抱く例は、『源氏物語』では六条御息所と秋好中宮、夕顔と玉鬘の例がある。この二つの例が狭衣の場合と決定的に異なる点は、同時進行ではない点である。またどちらの例も、源氏は娘に心を動かされはするものの、我がものとすることはない。可能性として狭衣のような展開が想定されても、現実に残されている物語としてそのような展開にはなっていないということが重要である。六条御息所と秋好中宮の場合、御息所が病になり、源氏が見舞う場面があるが、興味深いことにその場面で和歌が詠まれることはない。また御息所は後見を依頼する源氏に対し、「かけてさやうの世づいたる筋に思しよるな」とはつきり述べている。玉上琢彌氏はこの場面における御息所のことを、源氏に後見を承諾させておいて、「はなはだ言いにくい事を、はつきり正面きつて言ったのである」と解説する。<sup>16</sup>「御息所の深謀遠慮は、源氏が思うほど簡単ではなかった。さすが、源氏すらが「聞え合はせ人」と思っただけの事はある」とも述べている。更に玉上氏は母と娘と関係すること——同時進行ではないにせよ——について「六月大祓」にも言う罪と指摘している。<sup>17</sup>玉鬘の場合については、源氏が内大臣に真相を打ち明けたのち、内大臣は「ことさらにも、かの御あたりに触ればせむに、などかおぼえの劣らむ」と源氏に差しだしても悪いことはない」と考

えるが、これは内大臣が源氏と夕顔の関係をはつきりと認識していなかったためと考えられる。

一方『栄花物語』巻四「みはてぬゆめ」には花山院が中務母娘の双方に子供を産ませたという話がある。<sup>19</sup>この例は『狭衣物語』と同様、同時進行の関係である。

中務といひて、明暮御覽せしなかに、何とも思し御覽せざりける、いかなる御さまにかありけん、これを召して御足など打たせさせたまひけるほどに、睦まじうならせたまひて、思し移りて、寺へも帰らせたまはで、つくづくと日ごろを過ぐさせたまふ。

この部分は花山天皇女御低子の父為光がなくなった話の後のことを語る中で書かれており、中務を召人としたまま「かかるほどに中務が女、若狭守祐忠といひけるが生まれたりけるも、召し出でて使はせたまふほどに、親子ながらたならずなりて、けしからぬ事どもありけり。」と記す。母の中務は清仁親王（二宮）と二皇女を生み、娘の平子は昭登親王（一宮）と二皇女を生んだ。<sup>20</sup>和田英松・佐藤球両氏はこの部分を「出家の御身にて」として、出家しているながら修行もせず好き勝手をしていることを指摘し、母子ともに子を産ませたことについては、「中務母子ながら、懐妊せられたるをいふ」とだけ記述する。松村博司氏も同様に、母子同時懐妊の是非についての指摘はない。<sup>22</sup>『栄花物語』が花山院のこの出来事を記した意図は軽々に判断できることではないが、少なくとも「親子ながらたならずなりて、けしからぬ事どもありけり。」という記述からは「母娘」同時の懐妊について批判的といえるであろう。

『狭衣物語』本文に「我が年のほどよりも大人しき宰相中将のあ

りさまをなど、思ひ合せたまふにぞ、いとにげなう、あるまじきことかなと、独り笑みせられたまひける、「異様の心も添ひたるべし」「さま異なる御心のうち」と書かれる様に、姫君に求婚するはずなのに、その母にも惹かれることを狭衣自身も「あるまじきこと」と判断している。したがって母娘との通婚は当時においても特殊且つよからぬことであつたと認識できる。

しかし、その一方、人が社会的な禁忌に触れる思いを抱いてしまうこと自体は如何ともすることができない。そのことを『源氏物語』は理路整然と散文で事の是非を描き出し、一方『狭衣物語』は和歌によつて、そうした思いが人にはあるという事実のみを提示する。『狭衣物語』において和歌の贈答で繰り返される、狭衣対北の方と姫君への双方向への交流は非難の対象として記述されているわけではない。狭衣に生じたそういう思いを北の方という高貴な女性がどのように対処し、解消していったかを描くだけである。この二人の贈答歌が延々と綴られるのは、この難しい局面を破綻することなく進めていく二人のやりとりそれ自体におもしろさがあるためではないだろうか。特に三者間で意図的に内容がずらされていく③歌の贈答のあり方が、この場面の真骨頂であると考えられる。

## 六

狭衣物語の贈答歌には、このように和歌の応答のずらしのほか、詠み手と受けての間で、一首の和歌を互いに異なった解釈をして、そのずれから物語が展開していくというものがある。石壁敬子氏がそれを指摘されている。また『源氏物語』にも同様の例が玉鬘巻にある。玉鬘に懸想した大夫監と玉鬘の乳母との贈答歌の例である。

藤原定家は『明月記』の中で、源氏物語とともに狭衣物語も「歌に於いては抜群」と記す。小町谷照彦氏は歴史的に源氏と狭衣について述べられてきた多くの事例をあげているが、その中の『心敬私語』には「ふるまひ詞のえんにけたかきは、源氏狭衣なり。これらをすこしも窺はざらん歌人は無下の事と古人も申し侍り」と記されている。<sup>26</sup>

困難な場面に直面したときに、登場人物はまさに和歌のさまざまな技巧——義性・ずらし・曖昧さ・置き換えなどを駆使して切り抜けていく。拒絶や、断定、相手の倫理感を正切つて咎めるということせずし物事を処していく。それらが物語の「ふるまひ詞のえんにけたかき」ということであろう。この場面は、適齢期の若い男女の求婚という定型の設定に、母娘への双方の恋心という変化を加味したともいえる。危うい状況を狭衣と北の方がどう収束させていくのか、その過程を読ませる内容となっている。その上、ただ狭衣と北の方、姫君との和歌だけでなく、狭衣、東宮という別の方面への双方の歌も織り込み、筋の複雑さのレベルを上げている。その複雑さは散文によつて支えられ、その散文とあいまって和歌のずらしの技巧が際だつことになる。それが、この狭衣と故式部卿宮家母娘との贈答歌の場面が、巻四において二十%をしめる所以であり、当時の人々が複雑な和歌の応酬を楽しんだ証と考えられる。

注(1) 伝為明筆本、十九・二%・巻四巻の全行数、3234行・該当場面の

行数62行(二八裏九行目「月ころ大將もいて」〜五七表六行目「もといいてたまふに」まで)／伝為家筆本、八・八%・巻四の全行数、3646行・該当場面の行数67行(三十裏四行目「大將殿」〜六四裏十行目「き

こえたまいて給に」まで) / 伝慈鎮筆本、十八・〇%・巻四の全行数3852行・該当面の行数69行(二四裏七行目「おのくくころおいの十五日に」〜五一表十一行目「をきて給に」まで) / 平出本、十八・二%・巻四の全行数2904行・該当面の行数50行(二一裏十行目「おなしころほひの十日よひに」〜四六表一行目「きこえをき給いて給に」まで)。

(2) 久下晴康『狭衣物語』の構造(『平安後期物語の研究』一九八四年、新典社)「形代を見ることが本体の源氏の宮への恋慕を馳らすよすがとなつてしまつてゐる」とする。また、『狭衣物語の人物と方法』(平成五年(一九九三)、新典社)でも同様の見解をとつてゐる。小田切文洋『狭衣物語』覚書(『日本大学文学部研究年報』三四、一九八六年八月)も「形代に終始している」との見解である。倉田実『狭衣の恋』(一九九九年、翰林書房)は「源氏物語」の〈形代の恋〉を変奏、変容させて語ろうとしているかの営為である」とする。

鈴木泰忠『狭衣物語の基幹―(紫のゆかり)の物語の行方―』(『武威野女子大学紀要』二九、一九九四年三月)、『狭衣物語後半の方法―宰相中将妹君導入をめぐる―』(『論叢狭衣物語』本文と表現』(平成十二年(二〇〇〇)、新典社)は「常に源氏の宮を思い起こさせる消極的な存在」と指摘する。

(3) 堀口悟『狭衣物語』巻四論のための覚書(『日本文学論叢』一九八五年三月)

(4) 石壁敬子『狭衣物語』の和歌(和歌文学論集編集委員会『和歌と物語』平成五年

(一九九三)、風間書房)

(5) 鶴見大学蔵『中山家本狭衣物語』(影印本)による。合わせて吉田幸一『狭衣物語諸本集成』第一巻、伝為明筆本(一九九三年・笠間書院)を参考とした。なお現在、伝為明筆本の原本は東洋大学が所蔵している。

(6) 拙稿「伝為明筆本『狭衣』の本文異同について―深川本・伝為家筆本・伝慈鎮筆本との比較―」(『中古文学』第七五号、二〇〇五年五月)「狭衣」の本文異同―「右大臣の秘すらん女」について―(『国文目録』四九号・二〇一〇年二月)ほか。

(7) 岩波古典文学大系『狭衣物語』(昭和四十年、岩波書店)。日本古典文学集成『狭衣物語』(昭和六十二年・平成四年二刷、新潮社)、新編日本古典文学全集『狭衣物語』(一九九九年、小学館)。

(8) 伝為家筆本、慈鎮筆本、平出本は第一句は「ちりまがふ」。伝為家筆本と平出本、五句は「ものおもふかな」、伝慈鎮筆本は「物をこそ思へ」。(9) 『狭衣下紐』(群書類従所収)

(10) 「書かれ(かかれ)」の部分、伝為明筆本は「かかへ」。文脈を考え、あえて校訂した。

(11) 狭衣物語研究会編『狭衣物語全註釈』Ⅷ巻四(上)(平成二十六年、おうふう)、「全註釈」と略す。

(12) 伝為明筆本「あま〜」の右に「こ」と傍書(四四ウ)している為、「こまこま」と解す。

(13) 新潮日本古典文学全集『狭衣物語』下(昭和六十一年刊、平成四年二刷、新潮社)頭注に「東宮との比較を避けた巧みな返歌(一三八頁)」とある。

(14) 『国歌大観』(1908)拾遺和歌集(日本文学Web図書館)、以下特にことわらない限り、同じ『国歌大観』を参照する。

(15) 新編日本古典文学全集『枕草子』二八六段、四四二頁

(16) 玉上琢彌『源氏物語評釈』第三巻(昭和四十年(四十四年三版)、角川書店)三四〇頁

(17) 「六月大祓」『古事記』仲哀天皇の段。および「延喜式」の祝詞に「おやこたはけ」の内容として、母と子を犯す罪があげられている。

(18) 新編日本古典文学全集『源氏物語』③「行幸」三一〇頁

(19) 新編日本古典文学全集『采花物語』①巻四「みはてぬゆめ」一九一頁

(20) 後にそれぞれ冷泉院六宮と五宮とされた。

(21) 和田英松、佐藤球共著『栄華物語詳解』巻二（明治三十二年・明治書院、一〇九頁、国会図書館デジタルコレクション、請求記号 913.392.W13e）  
確認）

(22) 松村博司『栄花物語全注釈』1（一九九〇年、角川書店）

(23) 石壁敬子『狭衣物語』の和歌」（和歌文学論集編集委員会『和歌と物語』平成五年（一九九三）、風間書房）

新編日本古典文学全集『源氏物語』③「玉鬘」九七頁

(25) 『明月記』貞永二年三月二十日条

(26) 『心敬私語』（日本歌学大系第五卷所収、昭和三十二年、風間書房）

## 受贈雑誌(五)

上智大学国文学論集

湘南文學

昭和女子大学大学院日本文学紀

要

叙説

神女大国文

人文

人文学報

成蹊國文

成城國文學

成城國文學論集

清心語文

全国文学館協議会紀要

清泉女子大学大学院人文学研究

究科論集

専修国文

高岡市万葉歴史館紀要

上智大学国文学会

東海大学日本文学会

昭和女子大学

奈良女子大学日本アジア言語文  
化学科

神戸女子大学国文学会

鹿児島県立短期大学人文学科

首都大学東京人文学研究科

人文学報編集委員会

成蹊大学文学部日本文学科

成城国文学会

成城大学大学院文学研究科

ノートルダム清心女子大学日本  
語日本文学会

全国文学館協議会

清泉女子大学大学院

専修大学日本語日本文学文化学会

高岡市万葉歴史館